real Zambia

～１年９ヶ月のザンビアでの生活を通して～

１５年度１次隊　小学校教諭　ザンビア

宮村　香
（三重県桑名市立深谷小学校）

（1）活動計画の達成度、全期間の協力効果

私は Prince Takamado Basic School（以下、タカマド）に小学校教諭として配属された。教える科目は体育。体育は専門ではないが好きな科目なので、ザンビアの子ども達に教えるのをとても楽しみにザンビアに来た。

赴任した時、すでに体育の授業は時間割にしっかりと組み込まれていた。Grade1～4（16 クラス）をカウンターパートである Mr. Chitonena が教え、Grade5～7（9 クラス）を私が教えた。Grade8 は体育の授業がなく、校長にお願いして時間割の中に組み込んでもらった。Grade9 も体育の授業がなかったが、私が赴任した Term-3 は最終学期であり、Grade9 は最終学年として試験に合格しなければならないため､試験科目でない体育の授業を時間割に組み込むのは無理だと言われ、Grade5～8 の 12 クラスだけを担当した。

それぞれのクラスへは体育の授業がある前日に連絡をし、当日は授業の前に教室へ行って子ども達を着替えさせ、グラウンドへ移動させる。クラス担任は体育の授業の間、スタッフルームで休憩。Mr. Chitonena は酒臭いことが多く、「校長から頼まれているタイピングがあるから。」と体育の授業をほとんどしなかった。授業の度に声をかけ、教えるように促したが彼にやる気がないのでどうしようもない。子ども達の体育の授業がなくなるのは可愛そうだと思い、私が代わりに教えたこともあったが、現地語であるニャンジャ語が理解できないと授業するのは難しい。「このままでは自分が帰ったら体育の授業はなくなるだけだ。」と思い、クラス担任が体育の授業を教えていけるようにしようと思いたった。

まずクラス担任が教えやすいように体育の授業をパターン化した。ランニング、準備体操、メインアクティビティ、整理体操という流れで毎回授業を行った。準備体操と整理体操に関してはイラストの得意な調整員にお手伝い頂き、イラスト入りの説明書を作った。しかし、それでもタカマドの先生達は体育の授業をやらない。「香のコマだから自分達は教えない。」と言うのである。タカマドは日本の無償資金協力で建てられた学校である。建てられただけで今は他の公立学校と何ら変わりはないのだが、ザンビア人から“ JICA スクール ”と呼ばれていることからも分かるように特別視されているところがある。「無償資金協力で建てられた学校の中でも“ Prince Takamado ”という特別な名前がついているから。」ということもあるらしい。この特別意識をタカマドの校長や先生達はしっかり認識しており、「JICA に支援してもらって当然。」と勘違いしてしまっている。私が授業をするのは当たり前、ボランティアが学校にいるのは当たり前、研修会の準備資金、何か買いたい物がある時は真っ先に JICA の名前が出る。

体育教育をザンビアで普及させていくためには、いつまでも自分達で頑張ろうとしないタカマドだけにこだわっていてはいけないと思った。タカマドを模範校として他校にも普及させていきたかったのだがそれは困難であった。そこで他の学校への巡回指導を開始した。

タカマドの周辺校を回り、タカマドと 100mも離れていない Bauleni Basic School（以下、バウレニ）と私の家から一番近い Kabulonga Basic School（以下、カブロンガ）、そしてタカマドの 3 校で教え始めた。この 2 校を選んだのは場所的なことだけではない。校長が巡回指導に対して理解を示し、体育教育に対して意欲的に取り組んでいこうとする姿勢をみせてくれたからである。バウレニもカブロンガも Grade 5～7 だけをまず対象とした。バウレニ 15 クラス、カブロンガ 9 クラス、タカマドだけは Grade8,9 も含めた 16 クラスである。週 40 コマの授業を巡回しながら行うのは大変だったが、バウレニとカブロンガの先生は私を歓迎し、クラス担任主体の授業にも積極的に取り組んでいた。自分の意図していることを理解してもらえているのが目に見えて分かり、とても嬉しかった。しかし週 40 コマ、しかも 3 つの学校を巡回しながら授業を行うのは自分の体力的に無理があった。さらに他の Grade の先生達から「私のクラスにも来て欲しい。」という嬉しい悲鳴の声も聞こえる。どのようにしていけば体育教育を普及していけるのか悩んだ。

こう書いていると休みなく頑張り続けているように聞こえるかもしれないが、実際は体力的なことのほかにタカマドの校長ややる気のないクラス担任の先生達との人間関係にかなり悩まされ、学校に行けない時期もあった。何とかしなければ…ともがき、体育教育の普及どころか自分の授業もまともにできていない自分が不甲斐なかった。情けなかった。

そこへ同じルサカ市内の Secondary School で体育を教えている隊員（15 年度 2 次隊）から、Curriculum Development Centre（以下、CDC）の P. E. Specialist, Ms. Abigail と会うから一緒に会ってみないか、と誘われた。会ってみて驚いた。私が今まで考えていたようなことをザンビア人の彼女が真剣に語ってくれたのだ。私達は彼女に「体育教育普及のためのワークショップをやらないか。」と持ちかけ、そこからワークショップを開催するための準備を始めた。このことをタカマドの校長に話したがやはり理解してもらえず、「このタカマドでのあなたの仕事はどうなっているんだ。」と責められ、CDC から公式文書を書いてもらい、やっとワークショップの開催に向けて準備することを許可してもらえた。

自分の活動も残り 3 ヶ月となった 2005 年 1 月。首都ルサカ市内の約半数の学校を対象として体育教育普及のためのワークショップが行われた。私が巡回している学校を含む Chilenge Zone, Central Zone の他、隊員が関わっていたり、今後、巡回指導したりしていきやすい 4 つのゾーンを選んだ。ルサカ市内にある学校の半数の約 50 校である。このワークショップは私達 JOCV が主催したものではなく、CDC が主となって開催したことで、教育省、スポーツ省、UNZA の lecturer である Sports Specialist, Mr. Kakuwa や Edu Sports などからも来てもらい講義してもらうことができた。私達 JOCV も講義者として参加した。それぞれの学校からは校長と 2 人の先生が参加した。

ワークショップは大成功だった。しかしここで終わってしまっては意味がない。それぞれの学校（特に Basic School）で全てのクラス担任を対象とした同様のワークショップを開催し、どの学校でも、どのクラスでも、どの先生も体育の授業を行うようにしていかなければならない。私が巡回していた学校を含め、５校からはすぐ連絡があり、ワークショップに参加した先生達が中心となってそれぞれの学校でしっかりワークショップを行った。このワークショップを始めてからの私の活動は、これらのワークショップに講義者として参加すること、そして今まで通りタカマドでの授業（Grade5～7、9 クラス）とバウレニでの授業（Grade1～9、37 クラス）をすることであった。バウレニの校長は、「香が帰る前に全ての先生に体育の授業を教えて欲しい。」という意向を示したので、1 コマに 2 クラスを入れた時間割を組んだ。体がいくつあっても足りないと感じたが、多くの先生に出会えたことで「今後、自分がいなくなっても体育の授業は続いていく。」と希望を持つことができた。もちろん個人差はあり、全く教えていない先生もいる。

タカマドにいたってはワークショップさえ開催していない。何度か校長やカウンターパートに声をかけて促したが、校長曰く「お金がない。」からできないのだそうだ。「香がやりたいなら JICA にお金を出してもらったらどうだ。」どうして自分達の技術向上のため、子ども達のためを考えて行動することができないのか。やりきれない気持ちを抑えつつ、子ども達のため、その子ども達が将来、体育教育を担っていくかもしれないという希望を持ってタカマドでは私が一人で教え続けた。クラス担任の先生達に思いが伝わらなかったのは本当に残念でならない。

Basic School はつまり小学校である。クラス担任が全ての科目を教え、子ども達と 1 日中一緒にいる。Secondary School はそれぞれの科目の先生がそれぞれの時間に教えるのが当たり前となっているが、Basic School においてはクラス担任が体育の授業をやっていこうとしないと普及していかない。クラス担任の先生の協力、そして学校長の理解が不可欠となってくる。それだけではなく、Basic School における教師としての意識もこのことには関係して

くると思う。Basic School の先生は Secondary School より給料が低い。Basic School の教師となってから大学に通い、単位を取って Secondary School の先生へと変わっていく人も多い。このような背景から、Basic School の先生達は自分が Basic School の先生だ、ということに対して誇りを持っていない人が多いそうだ。日本の場合、小学校教諭と中学、高等学校教諭は同じ教諭でも別の職種としてそれぞれがプライドを持って仕事をしている。初等教育も重要な教育である。その重要性はザンビアに派遣されている理数科教師隊員も常々言っている。教師になる際のこのザンビアの現状が変わらない限り、Basic School の先生達の教師としての士気を高めていくのは難しいだろう。

前任の方はタカマド 1 校で体育の授業、クラブ活動を行い、他の学校とのスポーツ大会も企画した。タカマドをベースとして様々な活動を展開していったのである。私はタカマドだけにこだわらずに活動したこともあり、クラブ活動に関しては一切関与しなかった。体育教育に関しては素人であったが、現在ない科目を学校に普及させようとしているのだから、徹底して体育教育だけに関わったことは良かったと思っている。タカマドの校長の意に沿うことはできなかったのかもしれないが、長い目で見てザンビアの体育教育の小さな、そして大きな一歩を踏み出すきっかけを作ることができたと自負している。

（2）後任隊員への要望

タカマドに後任を呼ぶ、という形は取らなかった。巡回指導、そして CDC と協力して開催している体育普及ワークショップ（年 6 回開催する予定である。）をフォローしていくこともあり、郡の教育事務所に体育教育、そして巡回指導に理解のある学校を推薦してもらった。その結果、後任は私も巡回指導で行っていたことのある Kabulonga Basic School となった。この学校も日本の無償資金で建てられた学校だが、校長は JOCV の活動にとても理解がある人だ。私が巡回指導で来ていた時から整備するように声をかけていた学校裏の空き地も草が刈られ、とりあえず体育の授業ができるようになっている。さらに 3 年ほど前、日本人会から寄付という形で日本の無償資金で建てられた学校全てにスポーツ用品が配布されたことを確認し、それらの用品を他の学校とも共有して使うよう提案したところ、公式文書を出して他の学校に呼びかけてみる、と言ってくれた。これらのスポーツ用品は大事に保管されているだけであまり使われていないのが現状だ。同じことをタカマドの校長に提案した時は即、却下されたことを考えると、JOCV が活動していきやすいことが分かるだろう。

タカマドに対して随分悪いことばかり書いてしまったが、赴任して半年、朝から夕方までタカマドにどっぷり浸かって過ごせたことは、ザンビアの学校の仕組みや先生達、子ども達のことを理解するいい機会だったと思う。巡回指導をしていると体育に関してはいいが、学校行事や先生達、子ども達の様子がよく分からなくなるというデメリットもある。

1 次隊で赴任するということは、実際に活動を始めるのが Term 休み明けの 9 月からとなる。この Term は 11 月から授業がなくなる学校もある。テストが始まるからである。あくまでこれは私の思いなので後任隊員が自分で決めて活動すればいいと思うが、この Term-3 は巡回指導を行わず、CDC のワークショップ（来年も残り半分の学校を対象に同様のワークショップが行われる予定である。）とカブロンガの授業だけに専念したほうがいいだろう。ワークショップの中で先生達は用具不足、施設不足に対して不満を言っていた。しかし、チンポンブワァ（ビニール袋をぐるぐる巻いて作ったボール）や縄跳びなど、自分の身の回りで作れる体育用具はたくさんあるということを私もザンビアの先生や子ども達に聞いて学んだ。先生達の体育に対する「ちゃんとした道具がなかったらできない。」という先入観を崩していく必要性を感じた。そこで、それらの用具作りや未完成状態のグラウンドを整備していく等、他に頼らなくても自分達で体育の授業をやっていくことができる、ということをザンビア人の先生達に伝えていって欲しい。

CDC のワークショップに関してはもちろん体育連合の仲間（ザンビアのスポーツ、体育に関係している隊員で作っているグループ）にも協力をお願いするが、後任が中心となってやっていくことになるだろう。小学校教諭は体育の授業だけを教えるのではない、ということを理解したうえで、やはり体育教育を普及させていくことに力を注いで欲しいと願う。

まだまだクラス担任が自ら進んで体育の授業をしている姿を見ることができるのはかなり稀である。これは当然のことだと思う。だからこそ、現場で動くことのできる私達 JOCV が先生達を励まし続ける必要がある。私は今まで「どのようにしたらクラス担任の先生にやる気を出させることができるのか。」を考えてきた。何故授業しないのか、とクラス担任を責めてばかりいても仕方ない。先生達にも体育の授業を楽しんで欲しい。

目に見える形で伝えるのが分かりやすいと考え、授業記録をつけることにした。これは今までも自分の記録用としてはやっていたことだが、この授業記録をレポートとして校長に提出することで校長も状況が把握できるし、先生達も「やらなくちゃ。」という気持ちにさせることができる。先生達の出欠状況、授業に参加した子どもの人数と体操服で参加した子どもの人数、授業内容を記録し、その週を通じて感じたことを付け加えて提出する。今のところ、この方法はかなりの成果を挙げている。

（3）今後の協力の見通し

日本でたった 4 年しか教諭経験のない私が、ザンビアの国全体における体育教育の普及を始めようとしたのである。無茶としか言いようがないだろう。しかし、私達は JICA、協力隊としてこの活動ができるという大きな後ろ盾がある。活動は個々で行っているが、やはり JICA の隊員として派遣されているとザンビアの人達は受け取っているだろう。日本では無茶かもしれないが、このような背景があって「ザンビア国における体育教育の普及」に取り組むことができたのだと思う。

ザンビアは理数科教師が多い。理数科教師は中学校、高校でその科目を教える。前述したが、中学校や高校ではそれぞれの科目で教える先生が違うというのは当たり前である。しかし小学校は違う。クラス担任が全ての科目を教えている。英語や算数といった主要科目は教えるのが当たり前とされているが、体育も含め音楽、図工といった情操教育はその重要性を多くの人が認識していながら、後回しにされてしまうことが多い。どういった経緯でタカマドに体育の授業をする隊員が派遣されたのか分からないが、途上国で情操教育を普及させていこうとする動きがあるのだろう。とても大事なことだと思う。しかしこのような状況下、Basic School において隊員はどのようにこれらの科目の普及に携わっていけばいいのだろうか。

ザンビアにおける体育教育は始まったばかりだ。伝統的な遊びやネットボールのようなアフリカ特有のスポーツも続けながら、私達のアイデアや技術をザンビアのやり方として新しく取り入れ、ザンビアの体育教育の基礎を作っていくといいのではないかと思う。ピラミッドの底辺である学校の体育教育が充実していけば、一人ひとりがスポーツに関わっていけるチャンスも増え、ピラミッドの頂点を目指すことのできる人も増え、国全体が活性化していくのではないだろうか。スポーツにはそれくらいの力があると思う。その第一歩として今、多くの体育、スポーツ隊員が各国に配置され、それぞれの場所で頑張っているのだと信じたい。

しかし、以前 Basic School に小学校教諭として配属されていて後任を呼ばなかった隊員のこと、そして何故そうなってしまったのかを考える必要もあるだろう。私が知っている限り、音楽、養護、そして地方の Basic School で小学校教諭として活動している隊員がいた。彼らの話を聞く限りでは、ザンビア人が自分達で何とかしていけるようになったから後任を呼ばなかったのではなく、違う理由があったように感じた。このことは Basic School で小学校教諭

として活動する難しさを物語っているのではないだろうか。さらに必要、重要とされていない科目を教える難しさもあるだろう。

ザンビアの教育省、そして要請を出している JICA 事務所としてはどのような意図があってこれら情操教育を普及させていくための隊員をザンビアに派遣しているのか知りたい。その意図を知ることで、もっと効率的で一人ひとりの隊員が充実感を感じられる活動ができるようになっていくのではないだろうかと思う。今回、CDC のワークショップを隊員同士がと協力して行ったということを良い前例にして欲しいと思う。

隊員の活動は個々である。しかし個々で活動するだけでなく、JICA の隊員としていることをもっと利用し、お互いの活動を高めていけるような活動ができるようになっていくとザンビアのため、そして自分のためにもプラスになっていくだろう。体育教育を普及させていくプロジェクトを立ち上げ、グループ派遣のような形で JICA としても推進していけるようになるとなお良いのではないだろうか。

今後、ザンビアの体育教育がどうなっていくのか。楽しみである。

（４）現職教員派遣制度について

今回、私は現職教員派遣制度の２期生として派遣された。始めは派遣年月が「１年９ヶ月」ということに物足りなさを感じた。どうして「２年９ヶ月」ではないのか。やる気のあった派遣前はこの制度ではありえない「延長」さえ考えた。結果的なことからいうと、私はこの任期で満足している。「延長」がなかったからこそ、最後の３ヶ月で頑張れたとも思う。活動の充実度は派遣年月ではなく、その中味だと思う。

しかし、この制度がもっと現職教員の方が気持ち良く活動できるように改善されていくことを強く願う。教員が参加しやすいようにわざわざ作っていただいたこの制度なのに、私はとても日本の職場に迷惑をかけてしまった。４月、訓練前までの約２週間は私が勤務しなければならなかった。学校現場は４月の１週間でその１年間の仕事が決まるといっても過言ではない。その１週間も私の代わりに来てくださる先生は給料が支払われないために出勤できない。学校が始まってからも、本来は私が勤務しなければならないのに私はアフリカに行くと子ども達にも伝えたので教えることはできない。仮に教えられたとしても、子どもや保護者からの不信感に繋がると思う。訓練終了後から派遣までの約１週間は派遣前準備期間と設定していただけるのだから、この制度が４月１日付けから何らかの形で JICA に拘束されるようにしていただきたい。それぞれの教育委員会裁量、ということになっていたが、結局いろいろなことがたらい回しとなり効率的ではなかった。教育委員会も職場も対応に大変困っていた。

帰国の日程についても同じことが言える。本来の帰国日程は３月２７日となっていた。現職教員が同じ日に帰ってくることで帰国後研修が効率よく行われることは望ましいが、その後、２日間の研修後、様々な手続き（役所に行って日本国籍を復活させる、引越しをする等）を終わらせるのは困難極まりない。私は留守宅と勤務先が離れていたため、帰国後１ヶ月は知り合いの家に居候させてもらい、新しい職場へ転勤しての仕事始めとなった。

「丸２年の任期」という形で現職の先生方は参加しようとされているであろう。参加するときは気持ちよく送り出してもらえるよう、帰国後も協力隊事業のことを前向きに理解してもらえるよう、４月１日～３月３１日という丸２年の任期となるようにしていただきたい。

これから訓練が始まり、任国へ派遣される方へ。自分が今、どんな活動をしてどんなことを思っているのか、リアルタイムで子ども達に、同僚の先生方に、いろいろな方に発信していって欲しいと思います。いろいろ欲張ろうとせず、ありのままの自分を任国でさらけ出し、日本へ伝えていってください。

平成１８年１月７日